仏教を身近にする伝道誌　浄土真宗を弘める会

道標（どうひょう）

dohyo

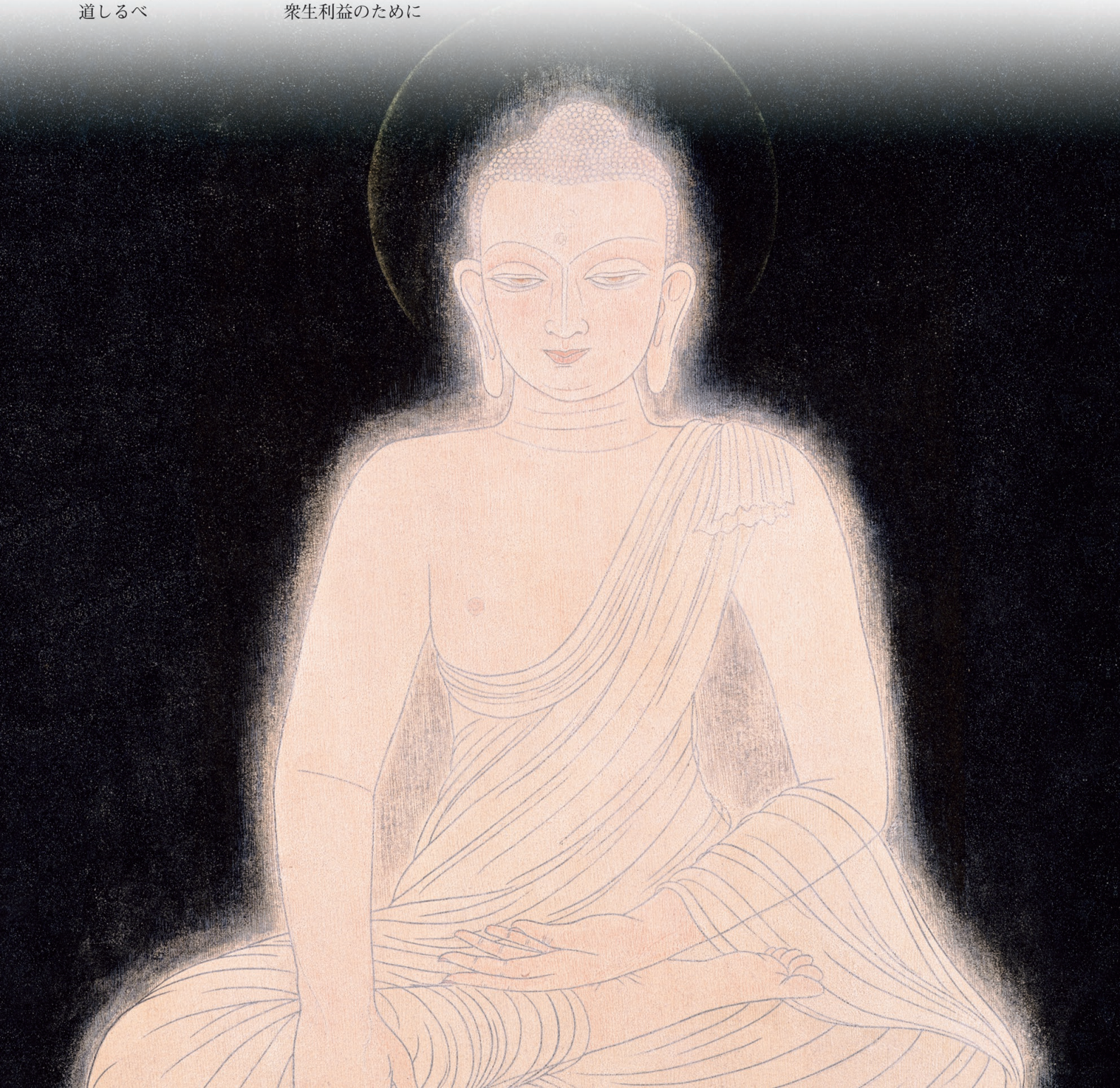
2019 冬季号

年間特集　「おそれ」

第一回・恐れの克服　塩入 宏行

連 載

あなたのいのちの物語　人の心の痛みと和解をもたらすいのちの力
習わしを科学する　隠居
道しるべ　衆生利益のために



年間特集

「おそれ」

第一回 塩入 宏行さん

「恐れの克服」

驚・懼・疑・惑

過日、「恐れ」というテーマで原稿依頼をいただいたとき、最初に私の頭に浮かんだのは、剣道の〈驚・懼・疑・惑〉、いわゆる四病、四戒という教えでした。

二番目の「懼」が、おそれる、びくびくするという意味で、危惧の惧は懼の俗字です。これら四種のネガティブな感情は相互に連動して作用し合い、心の平静を失わせます。例えば、意表を突く敵の動きに驚かされると恐れが生じ、必然的に迷いが入り込んで、後れをとることになります。とくに、この「恐れ」をどう克服するかは、剣道人にとって難しく、厄介な課題の一つになっています。

恐怖への対策

我々人間には、恐れや痛みに対する自衛策が備わっています。英語にもfaint in terrorという表現があるように、気絶する、すなわち意識を失うことです。私は恐れのために気絶したことはありませんが、バイクの事故で意識をを失うことで、一時的ながら耐えきれないほどの激しい痛みから解放されることは実感しました。

しかし、昔の武術家は真剣勝負という修羅場を何度となく通り抜けた体験から得た自信・慣れを通して、一時的ではない恐怖の対処法を身に付けたと考えられます。紙面の関係で、ここで詳しくは書けませんが、〈捨て身〉の教えや、『葉隠』の〈死に狂い〉などが考えられます。現代のトップアスリートたちも、日頃の鍛錬を通して、死の恐怖にも匹敵する激しい恐怖に対応するすべを体得したのでしょう。

打席に入る直前、垂直に立てたバット越しに投手を見るイチロー選手の動作や、両手の人差し指を合わせて祈るようなしぐさの後、ボールをキックする五郎丸選手を覚えておられる方も多いでしょう。制限時間を告げられた力士たちが塩に向かい、最後の仕切りから立ち合いまでの動作も、それぞれのリズムや動きも各人各様ながら、判で押したように変わりません。ルーティーンと言われるこれら一連の動作は、失敗・負けるかもしれないという危惧など一切の雑念を去り、集中力を高める効果を持つと考えられます。

王貞治選手が〈ボールが一瞬止まって見える〉ときがあったと語り、剣道八段審査に合格した複数の剣士たちは、審査時のパフォーマンスを振り返り「あれほどの遣い方は二度とできないだろう」と述懐していますが、極度の緊張の中でいわゆる〈ゾーンに入る〉状況が生まれ、あらゆる恐怖から解放され、信じられないような力が発揮されることを示していると言えます。

極度の緊張の中で〈ゾーンに入る〉

また、本稿を書くにあたり、埼玉大学でのかつての同僚、野瀬清喜氏（ロスオリンピック銅メダリスト、全日本柔道８０キロ級１０連覇）が、「試合前に怖くて、更衣室で柔道衣を頭からかぶって震えていたことがある」と話していたことを思い出し、直接電話して詳しい話を聞くことができました。その一部を要約しますと、「怖かったのは怪我だけで、相手ではなく、大型選手が相手の時でもどうやって投げてやろうかと楽しみでさえあった。

しかし、国際大会で２回続けて負けた（当時、優勝以外は評価されず、２位でも負けでしかなかった）後のハンガリー国際は例外だった。このまま負け続けるのでは、と不安に駆られ、寝汗はかくし、よく眠れない。何より、大切な試合に負けると、それまで積み上げてきたものすべてを失うような気がして、激しい恐怖を感じた。決勝戦の相手はオリンピック金メダリスト、東ドイツのウルチ選手だった。そのウルチ選手が更衣室で試合の直前まで野瀬選手の研究に没頭しているのを目にしたとき、彼も自分と同じ心境にいることを知り、「よおし！お前も自分の持つものを全部出してみろ。自分も出すぞ」と、開き直れた。試合は両方の中指の爪がはがれ、出血がひどく失格寸前という激闘ながら勝つことができた。

潜在危険と死の恐怖は重なるように感じてなりません

勝因は、ギリギリの状態の中で、恐怖を乗り越えるきっかけをつかんだことだと思う。」とのことでありました。

日々の備え

以上、恐怖とその対処法について、思いつくままに、それも自分なりの視点で、書いてきましたが、その間にも、特大級の台風１９号が襲来し、各地に甚大な被害が出ています。潜在危険（ハザード）を身切り、顕在化する前に対策を講じるのは至難の業であることを思い知らされるばかりです。そして、何故か、自分にはこの種の潜在危険が、死の恐怖と重なるように感じてなりません。死あるいは死の恐怖から逃げようと目をそらしたり、それを宗教家や哲学者の守備範囲だと責任を転嫁することなく、きちんと向き合い、備えをすることが必要だと改めて感じます。

塩入宏行（しおいり　ひろゆき）

１９４２年生まれ。東京教育大学文学部卒。同大学大学院研究科修了（体育学修士）。大阪体育大学・埼玉大学勤務。その間、文部省在外研究員としてパリ大学留学、フランスナショナルコーチ：教育学部附属中学校長（兼任）。退職後 JICA シニアボランティア（派遣国チリ）。埼玉大学名誉教授。

剣道教士7段、居合道・杖道5段。

主な指導歴：全日本学生女子団体優勝、男子団体3位、（埼玉大学）：ヨーロッパ選手権男子団体優勝（フランス）：南米選手権男女団体2位（チリ）。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

9話目

「人の心の痛みと和解をもたらすいのちの力」

有島武郎　「一房の葡萄」

『一房の葡萄　他四篇』（一九八八年（原著、一九二〇年）岩波文庫）

有島武郎の自身の体験に基づいて書かれた創作童話。少年の日々への追憶、先生との思い出、どこか悲しみを感じさせる要素を葡萄という果実の甘酸っぱさと色彩によって巧みに描写されている名作。

語り手の「僕」は横浜の小学校に通っていて港の絵を描くのが好きだ。ところがどうしても海の藍色と船に塗られている洋紅色とがうまく出せなかった。学校の友達の西洋人のジムの絵具は舶来の上等なもので、とくに藍と洋紅は美しい。「僕はジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなってしまった」。

臆病者で友達も少ない「僕」はジムが自分を疑っているように思い、それがまた絵具がほしいという気持ちに火をつける。その日、気が沈んで心が暗くなり、昼休みに皆が外で遊んでいるのに部屋に残っていた「僕」は、とうとうジムの卓の蓋を開け二色の絵具を盗んでしまう。

次の時間が終わった後、クラスの「よく出来る」生徒に運動場の隅に連れて行かれ、ジムなど数人の生徒たちに問いただされ、ポケットの中の絵具を見つけられてしまう。「僕の体はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前が真暗になるようでした。……取り返しのないことになってしまった。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だった僕は寂しく悲しくなって来て、しくしくと泣き出してしまいました」。

「僕」を連れて来て罪状を告げた生徒数人の前で、女の先生は「それは本当ですか」と聞く。「本当なんだけれども、僕がそんないやな奴だということを、どうしても僕の好きな先生に知られるのがつらくて、また泣き出してしまう」。そんな「僕」を見つめていた先生は、生徒たちを帰らせると、「やがて静かに立って来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして」、「絵具はもう返しましたか」と小さな声で言う。深々とうなづくと「あなたは自分のしたことをいやなことだったと思っていますか」と聞く。

涙が止まらない「僕」に、先生は次の時間は授業に出なくてよいからその部屋で待っていなさいと言い、「二階の窓まで高く這い上った葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎって、しくしくと泣きつづけていた僕の膝の上にそれをおいて」、静かに部屋を出て行く。「僕」は葡萄を食べるどころではなく、淋しく悲しく泣いているうちに寝入ってしまう。先生が帰ってきて目を覚ますと、先生は「明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。きっとですよ」と言い、カバンの中に葡萄の房を入れた。

翌朝、学校の門をくぐり抜けると、待っていたようにジムが飛んで来て、親切に先生の部屋に連れていく。先生は「ジムはあやまってもらわなくってもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい」とにこにこしながら二人を向かい合わせた。そして、また葡萄の一房をもぎり、その真っ白い手の上で銀色の鋏で分けて、二人に渡した。

あの先生は今どこに行かれたか。「僕は今でもあの先生がいたらなあと思います」。

「僕」の孤独と悲しみの表現は巧みで、読者は身に覚えがあると感じる。それを受け止めて、困難を超えた暖かい交わりをもたらす先生の姿が心に焼きつく。「大理石のような」白い手の上の「一房の葡萄」が、人の心の痛みと和解をもたらす奥深いいのちの力を象徴している。

島薗 進（しまぞの すすむ）
1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを〝つくって〟もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

習わしを科学する

隠居

新帝の御即位の大礼もつつがなくすまされ、奉祝の気分が満ち満ちて誠に結構なことでありますが、その蔭に、先帝の譲位という重大な事が忘れがちなのは残念です。二〇〇年ぶりの譲位で、皆驚きました。しかし天皇の歴史をふりかえりますと、むしろ譲位するのが常で、平安時代以来、ほとんどの天皇は譲位し上皇（院）になっています。民間で譲位に当たるのが隠居です。これもまた戦前までは、隠居はごく当たり前の習慣でした。家長というものは家督として様々な特権を持つと同時に、これまたたくさんの義務を負わなければなりません。昔は祭りでもお役が回ってきます。共同体には面倒な約束事があって、その努めも大変です。いったん不祥事があれば責任を問われるのも当主です。ですから、なるべく早く、子供に家督を譲って隠居したいと思うのが人情です。江戸時代にはこのような理由で楽隠居する人がいっぱいいました。

近ごろでは珍しくしばしば隠居が行われるのが茶の湯の世界です。三〇年ほど前に官休庵武者小路千家有隣斎千宗守宗匠が隠居して現不徹斎宗匠が家元になりました。その後、遠州流の小堀宗慶宗匠が隠居して宗実家元へ、裏千家鵬雲斎千宗室宗匠が隠居して坐忘斎家元へと代替わりをしました。最近では昨年、表千家では而妙斎千宗左宗匠が隠居して猶有斎家元が誕生しました。

表千家の代替わりで、而妙斎宗匠は宗旦を隠居名としました。すでに歴代の中に隠居して宗旦を名乗った家元が三人いて、元伯宗旦から数えると表千家に五人目の宗旦が生まれたことになります。

最初の宗旦、すなわち元伯宗旦は千利休の孫にあたり、その子供たちが、今日の三千家を形成することになりました。宗旦自身は体調が万全でないこともあって、どこへも仕官（就職）することなくわび茶に徹しました。しかし経済的には、それでは立ち行きません。そこで子供たちの仕官を熱心に進めました。ようやく宗旦が六五歳の時、三男の江岑宗左が紀州徳川家に仕官できて一安心。宗旦は隠居することにしました。

家督を江岑に譲って、屋敷の裏の一角を隠居屋敷とし、末っ子の仙叟宗室と妻の宗見をともなって引越しました。今は子供が独立すると家を出て、親が家に残りますが、昔はその逆でした。宗旦は隠居して新しい人生を設計します。それは理想のお茶を実践することです。宗旦が隠居所に作ったのは一畳台目、床無し、という、これ以上捨てられるものは何もない極小のわびの茶室でした。もはや世俗的なおつき合いの必要がない隠居宗旦の茶室です。

まだ宗旦には望みがありました。維摩居士の方丈の如く、一切合切を包含する四畳半を建てる望みです。末子の仙叟が前田家に仕官したのを機に宗旦は又、隠居します。そして作った四畳半に、また隠れるの意味で「又隠」と命名しました。

隠居といっても中身は色々です。宗旦のように、究極のわびを実現すべく、自由闊達な世界に身を置くのも、隠居の一つではないでしょうか？

熊倉 功夫（くまくら いさお）
１９４３年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長を歴任し、現在MIHO MUSEUM（ミホミュージアム）館長、国立民族学博物館名誉教授。２０１３年、中日文化賞受賞。著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和 うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉 千利休』、熊倉功夫著作集（全7巻）等多数。専門分野は日本文化史、茶道史。

天岸淨圓（あまぎし じょうえん）
1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。

衆生利益のために

寛喜三年（一二三一）夏のはじめ、五十九歳の親鸞は風邪の高熱のため床に臥した。その四日目の明け方、苦しげに「真はさてあらむ」と、つぶやいたと妻の恵信尼は記す。訳をたずねると「臥して二日目から「無量寿経」を読みつづけていた、それも目をふさげば瞼の裏に経文がはっきりと見える」という。ただ目的がわからない。

よくよく記憶をたどれば、十七年前の建保二年（一二一四）、利根川沿いの佐貫という町で、大飢饉のために死にゆく人びとのために「三部経」を千回読もうとしたことがあった。ただし四、五日で過ちに気づき止めた。その執心が甦ったのだと親鸞は語った。

親鸞と恵信尼が生きた約百年は、今日では災害世紀といわれる。寒冷化にともなう気候変動が飢饉を誘発し周期的に大飢饉が襲う。鴨長明は『方丈記』にそのすさまじさの一端を、養和の飢饉では四、五月に洛中に捨てられていた遺骸は、四万二千三百におよんだと記している。

寛喜三年も大飢饉だった。十七年前は「名号（念仏）のほかには何ごとの不足にて、可ならず経をよまんとするや」と深く反省して、経典読誦による心を捨てたはずだった。しかし、そうではなかったのだ。発熱によって混濁した意識の内奥から、「何とかしたい」という激情が「経」を読ませていた。「人の執心、自力のしんは、よくよく思慮あるべし」と気づいて読経が止まった。

「助けたい」との情念と念仏専修の狭間で親鸞は呻吟していた。後に『歎異抄』に、「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。」と述懐する。

今生は自分も含めて、すべて仏に助けられる者である。助けられる者が助ける者となったことへの猛省だった。ただ「助けたい」という意志も仏のお育てのはずだ。すすんで為すべきである。ただ、自身の効とするものではない。

編集後記

インターネットやテレビ電話の発達によって遠く離れた人との交信が簡単になり、あらゆる情報が手に入る便利な世の中になった。昔「恐れの総和」という映画を見た。一介のテロリストグループが米ソの核戦争を誘発させる。キーワードは「恐れ」、いくらツールが発達しても相手の心の真意を測るのは所詮人間。この「恐れの総和」によって戦争にもなっていく、そんな気味が悪い話だった。特集ページ年間テーマは「おそれ」にさせてもらった。今我々は自然災害の猛威に困惑している。人間の心の底辺にはいつも「おそれ」があった。近年の出来事は人類にそんな心を再び呼び起こさせるものであると思う。

（合掌）

令和二年度年忌表

一周忌	令和元年没
三回忌	平成三十年没
七回忌	平成二十六年没
十三回忌	平成二十年没
十七回忌	平成十六年没
二十三回忌	平成十年没
二十五回忌	平成八年没
二十七回忌	平成六年没
三十三回忌	昭和六十三年没
五十回忌	昭和四十六年没

表紙の絵

成道の仏

日本での釈尊像の決定的なものはない。ところがインドでは、密教化（六世紀以降、ヒンドゥ教の影響の強い現世利益的な仏教となる）して以降の釈尊像は触地印となり、ネパールやチベット、インドシナの仏教国ではこれが典型的な造像となっている。成道の際にマーラ（悪魔）に打ち勝って、そっと右手を地面に触れ、土地の女神を呼び出し、マーラに勝ったことを証明させたことによる。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）

仏教を身近にする伝道誌 道標 二〇一九年 冬季号 2019年12月1日発行 発行所／浄土真宗を弘める会 萬福寺内 大阪市西区南堀江1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail：ktda8.10@gmail.com